

# 音楽に対する感性を育む題材の授業デザイン

— 個の感性を育み、新たな価値が生まれることを通して —

音楽科研究会議

研究員 篠塚 真理子 (川崎市立今井小学校) 森 円佳 (川崎市立坂戸小学校)

梶 智美 (川崎市立中原中学校) 石塚 倫世 (川崎市立生田中学校)

指導主事 伊藤 由佳子

## I 主題設定の理由

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編及び中学校学習指導要領(平成29年告示)解説音楽編では、これまでの我が国の学校教育の成果と課題を踏まえ、改訂の基本的な考え方として「音楽に対する感性を働かせて、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見いだしたりすることができるよう、内容の改善を図る」「音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働き(音楽文化)についての意識(理解)を深める学習の充実を図る」ことが示されている。また、中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育」においては、目指すべき新しい時代の学校教育の姿として、「全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていくことが必要であることが示された。

このことから、本研究会議では、市内学校における音楽科の実情や研究員自身のこれまでの実践の省察を踏まえ、音楽科の学習を通して育成を目指す資質・能力を「自ら判断し、表現する力」「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる力」「生涯にわたって音や音楽と親しむ姿勢」と考えた。この資質・能力の育成に向けて、音楽科の学習で大切なことは、児童生徒が「自分にとっての音楽の意味や価値を見だし、音楽との関わりを通して自己の存在を築いていくこと」であり、そこには「音楽に対する感性の働き」が大きく関わると考えた。

そこで、個別最適な学びを通して「個の感性を育む」ことと、協働的な学びを通して「異なる感性が集まり、新たな価値が生まれる」ことを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を考える。そして、日々の音楽科の学習が資質・能力の育成に向けて効果的に行われるよう、学習内容や活動を「児童生徒の立場」から見直し、児童生徒の内面性に目を向け、その根底にある「感性」を豊かに育む教育に着目をして、題材の授業デザインについて実践・検証し、研究することとした。

## II 研究の内容

### 1 研究の視点

#### (1) 音楽科の学習についての省察

本研究会議では、これまで行われてきた音楽科の授業について振り返った。多くの音楽科の授業において、児童生徒が「うまくできる」「早くできる」「多く知る」「正しく分かるようになる」などという目に見える結果を重視した指導が多くみられ、その結果、教師が表現の工夫を伝えて楽曲を完成させたり、活動を重視したりする授業が多くなっていたことが見えてきた。

#### (2) 音楽に対する「感性」のとらえ

次に、「感性」の要素は多様であることから、「音楽に対する感性」の意義の確認を行った。

学習指導要領解説音楽編では、音楽的な見方・考え方を働かせる上で重要であることとして、「音楽に

対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や社会、(伝統や文化など)と関連付けること」が示されている。さらに、この感性とは、「感じ取って自己を形成していくこと、新しい意味や価値を創造していくことなども含めて「感性」の働きである」ことも示されている。

これを参考にしながら、本研究会議における「音楽に対する感性」の定義を表1のとおりとした。

表1 本研究会議における「音楽に対する感性」の定義

「音楽に対する感性」は、児童生徒が音楽に出合って新しいことに気付く、知るという心の動きに働きかけるものである。さらに、学習の中で音楽に対してじっくりと思考し、自分の考えをもつことで、自分と音楽との関係、自分にとってその音楽の意味や価値観などを作り出していくような能動的な時に磨かれるものである。

この定義から、本研究会議では、個別最適な学びを通して「個の感性を育む」ことと、協働的な学びを通して「異なる感性が集まって新たな価値が生まれる」ことを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の視点で授業改善を考えることとした。

### (3) 児童生徒が音楽に対する「感性」を働かせるための3つの手立て

音楽科の題材を構想する際、考慮すべき要素は多様である。このうち、前述した本研究会議の定義した「音楽に対する感性」に係って、児童生徒の内面について表2のとおり仮説を立てた。

表2 音楽科の学習に係る児童生徒の内面についての仮説

ア 自分の考えをもったときに感性が働く→「音楽に対する自分の考えをもつ」  
 イ アウトプットすることは、感性を発揮する→「自分の考えと他者の考えを比較する」  
 ウ 音楽に対しての自分の感情に対して、なぜそう感じるのか突き詰めるようにすることで心が刺激されて感性が磨かれる→「音楽を形づくっている要素やその働きの視点で音楽をとらえる」

この3つの仮説を児童生徒が「感性を働かせるための視点」とし、さらに授業を実践する上で、それぞれ「教師の題材デザインの手立て」を考え、図1のように研究を構想した。

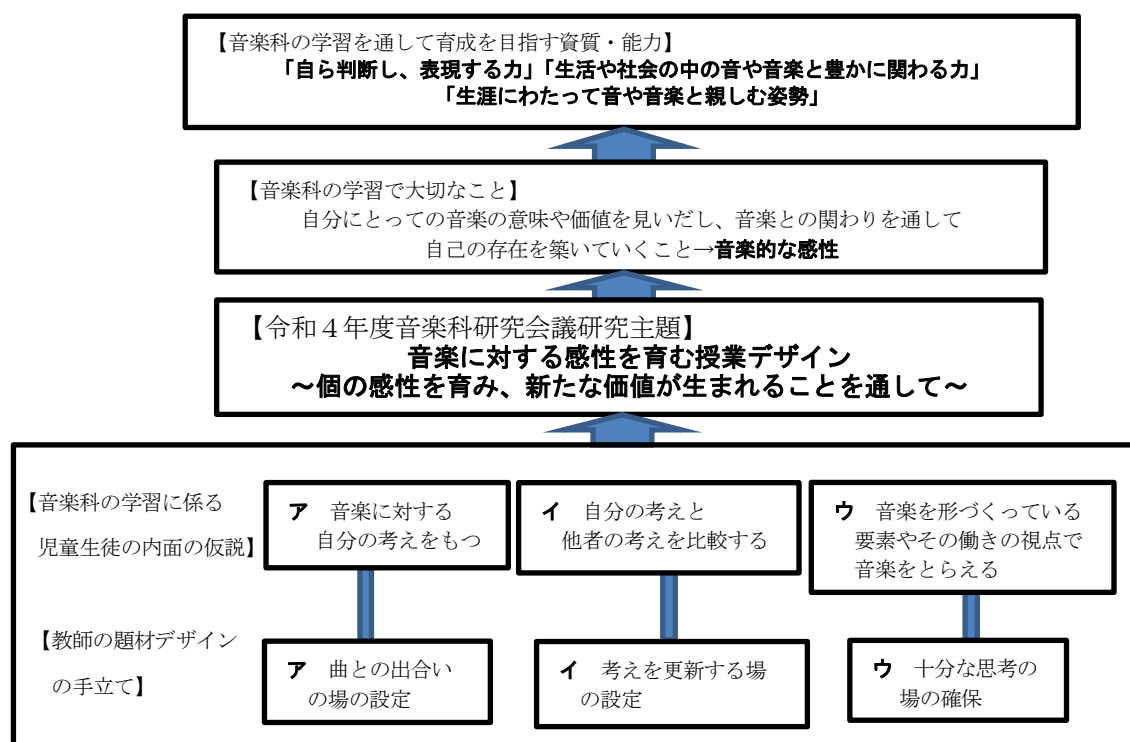


図1 研究構想図

## 2 研究の実際（授業実践）

### （1）A小学校 第5学年 A表現歌唱 B鑑賞「詩と音楽の関わりを味わおう」1/6時間目

#### 本時の教材「待ちぼうけ」

#### ①本時の目指す児童の姿

「待ちぼうけ」の旋律について知覚したことと、それらの働きについて感受したこととの関わりについて考えたり、曲想と音楽の構造や歌詞との関わりについて理解したりする。一人一人が音楽を形づくっている要素やその働きの視点で感じ取ったことを、他者の考えを受け入れて新たな価値観をもつなどして音楽と向き合う。

#### ②具体的な教師の手立て

##### ア：曲との出会いの場の設定

詩と音楽の関わりを味わうために、最初に歌詞のみを提示して音読をしたり、物語の移り変わりをイメージしたりする活動を行ってから曲と出会う場を設定した。

##### イ：考えを更新する場の設定

詩・旋律・表現の工夫について Google Jamboard の付箋に書き、4人程度のグループで共有した。グループ共有の後、各グループの Google Jamboard を全体で共有し、その部分を音楽で確認した。

##### ウ：十分な思考の場の確保

鑑賞する教材は、3番から速度が遅くなる表現の演奏である。旋律をよりどころとして音楽をとらえるために、最初は2番までのみに絞って聴いた。その後、5番まで1曲を通して聴き、その他の表現の工夫に気付くようにした。

#### ③教師が講じた手立てによる児童の姿の考察

##### ア：音楽に対する自分の考えをもつ

音楽との出会い方を丁寧に行ったことで、その後の学習において自分の考えが変化していく様子がみられた。学習の終末には、「この歌の旋律を繰り返すところがおもしろい」「ころりころげたところの旋律は本当のところころしている感じだったところが私は好きです」のように詩と音楽との関わりについて考えることだけでなく、「ここが好き」など、自分と音楽との関わりについて発言していた。

##### イ：自分の考えと他者の考えを比較する

図2の児童は、他者との対話を通じて人によって感じるものが違うことに気付いている。さらにそれを自分の考えとすり合わせて、「なるほどと納とくできた」と記述していた。このように、小グループでの共有を全体で共有することで、個人やグループでは出なかった考えに触れることができ、さらに自分の考えを更新する姿が見られた。

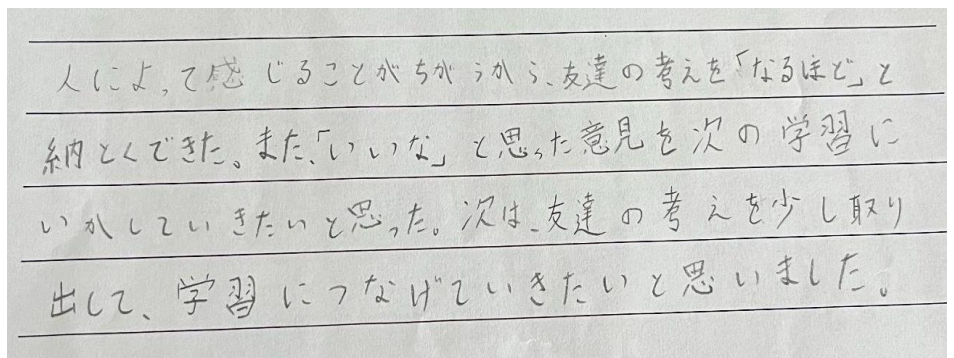


図2 児童の振り返り

##### ウ：音楽を形づくっている要素やその働きの視点で音楽をとらえる

最後に初めて1曲を通して聴いた際に、同じ旋律なのに違って感じたのはなぜだろうと考える姿がみられた。児童たちにとって、音楽の何がどうなっているのか、自分がこう感じたのはなぜなのか等、考えるものを限定することで、さらに思考が深まった。

## (2) B中学校 第1学年 A表現歌唱「情景を思い浮かべながら、表現を工夫して歌おう」

1/2時間目 教材「赤とんぼ」

### ①本時の目指す生徒の姿

日本の歌曲「赤とんぼ」の旋律について知覚したことと、それらの働きについて感受したこととの関わりについて考えたり、曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて理解したりする。一人一人が日本の歌曲「赤とんぼ」と向き合い、協働的な学習を通して、自分の意見と他者の意見を比較するなどして、さらに自分の考えをもち、音楽表現に生かすことができる。

### ②具体的な教師の手立て

#### ア：曲との出会いの場の設定

音楽との出会いでは、生徒が満足するまで音楽に触れる場面を設け、これまでの経験の中で培われた個の感性を働かせながら、自由に発言できるようにした。音楽との出会いの際に感じた感情が学習を通して変化する様子を実感するために、最初に感じた自分の考えは学習の終わりまで大事に覚えておくよう強調して伝えた。

#### イ：考えを更新する場の設定

様々な感じ方に触れるために、個人がとらえた音楽の特徴を全体で共有する場面を設定した。発表した生徒の意見を全体に広げ、他の生徒の意見とつなぎながら意見共有を図り、歌ったり音楽を聴き直したりして音と言葉を往還させながら対話的な学びの場面を設けた。

#### ウ：十分な思考の場の確保

音楽の出会いの場面であらゆる視点で音楽を感じ取った生徒たちの意見から、旋律をよりどころとした生徒の意見を取り上げ、あらためて全員が旋律の視点で、音楽をとらえる場面を設定した。

### ③教師が講じた手立てによる生徒の姿の考察

#### ア：音楽に対する自分の考えをもつ

身体を揺らしながら聴いたり、自分の過去の経験と曲の雰囲気を重ね合わせたりしながら聴く姿がみられた。人によって、音楽の感じ取り方は多様であることに気付く様子がみられた。

#### イ：自分の考えと他者の考えを比較する

図3のように、発表する生徒は、自分の考えを友達に伝えるために、言葉を選んで発表する姿が見られた。そして、他の生徒は、自分の考えと友達の考えを比較したり関連付けたりしながら、さらにそれを音で確認していた(図3)。特に自分の気になった部分について他者と共感する生徒が多く存在した。一方で、個で考える時間を長く取りすぎ、考えを更新する場の設定のタイミングが遅かったことが課題である。自分の考えを表出することが困難な生徒は自らの学習を調整することが難しい様子があった。



図3 授業の様子

#### ウ：音楽を形づくっている要素やその働きの視点で音楽をとらえる

音楽を形づくっている要素を旋律に絞ったことで、旋律の特徴と自分の感受を関連付けて考える姿が多くみられた。同じ部分の旋律でも人によって様々な感じ方があることに気付く生徒もいた。

さらに、協働的な学びを通

⑥ 「赤とんぼ」の学習全体を振り返って、日本歌曲について考えたことは何ですか。  
また今後、日本歌曲を聴くときや歌うときに生かしたいことは何ですか。

日本歌曲はゆったりとしていて、メロディーと歌詞から情景をつく。  
た人の気持ちが伝わるなと思いました。このような曲は人の心に  
寄りそう感じがありました。日本の曲だからその横になられるようなメロディー  
がとても落ち着くなと思いました。今後日本歌曲を聴いたり歌うときはメロディー  
の動きと歌詞のつながり部分部分でつくった人の気持ちをよみとりたなと思いました

図4 生徒の題材を通した学習の振り返り



して、様々な感じ方に触れた後、再度、自分でその音楽について考える時間を設けると、図4のように、他者の意見も参考にしながら自分にとっての音楽の意味について考えることができていた。

### (3) C 小学校 第5学年 A 表現歌唱 B 鑑賞「詩と音楽の関わりを味わおう」 5/6 時間目

#### 本時の教材「スキーの歌」

#### ① 本時の目指す児童の姿

「スキーの歌」の旋律について知覚したこととそれらの働きについて感受したこととの関わりについて考えたり、曲想と音楽の構造や歌詞との関わりについて理解したりする。音楽活動を楽しむことだけでなく、一人一人が自ら音楽を感じる事（感受）と音楽の要素の視点で音楽をとらえること（知覚）を関連付けて考え、それを生かして表現する。

#### ② 具体的な教師の手立て

##### ア：曲との出会いの場の設定

自由に音楽をとらえて自分の考えをもつために、何も視点を与えずに音楽と出会う場面を設定した。その後、何度か歌い試しながら、再度どんな感じがするか、音楽の特徴はどうかを発問した。その際、自分の考えを言葉で表出することに難しさを感じている児童には、音楽室の掲示物（図5）を活用するよう促した。



図5 音楽室の掲示物

##### イ：考えを更新する場の設定

自分にはない考えや感じたことに触れたり、さらに自分の考えを追究したりすることができると思え、旋律から一人一人が知覚・感受したことを、全体で共有した。その際、実際に歌って確かめることによって感性を働かせて理解していくようにした。

##### ウ：十分な思考の場の確保

よりどころとする主な音楽を形づくっている要素を旋律に絞った。旋律の特徴を感じ取るために、何度も聴いたり、歌い試したりしながら、知覚と感受を関連付けて一人一人が自分の考えを書けるようにした。

#### ③ 教師が講じた手立てによる児童の姿の考察

##### ア：音楽に対する自分の考えをもつ

何も視点を与えずに曲と出合った際、児童は旋律線を描いたり、身体を動かしたりしながら聴く姿がみられた。曲との出会いで一人一人が自分の考えをもったことにより、授業後には最初は単に楽しい曲だなと感じていた児童も音楽的な視点で音楽をとらえている様子がみられた。

##### イ：自分の考えと他者の考えを比較する

自分の感じたことと異なる意見と比較して、自分の考えを述べる姿がみられた。さらに、個人の考えを全体に広げながら歌って確認する、これを繰り返していく中で、他者の意見と自分の考えを比較しながら学んでいる様子がみられた。一方で、表現を伴わずに考えるのみの時間が長かったことが課題であった。感性は表現と密接に結びついていて、思考と表現を行ったり来たりしながら学ぶことこそが感性を豊かにする姿につながると感じた。

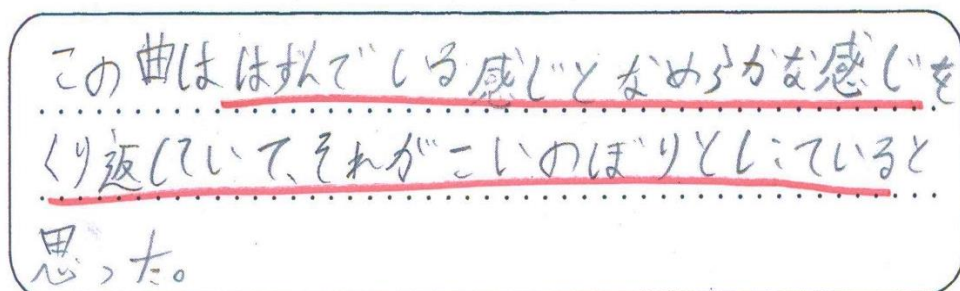


図6 児童が記述したワークシート

## ウ：音楽を形づくっている要素やその働きの視点で音楽をとらえる

前時の学習を生かし「繰り返し」の効果を考えたり、既習の曲に似ていることに気付いた発言をしたりする姿もあった（図6）。既習事項と結びつけている姿は感性を働かせている姿であった。十分に思考する場を確保し、さらに思考する対象が限定されることで、自分の考えをもつことができていた。協働的な学びの際に、自分の考えを使って他者と論じ合う様子もみられた。

### (4) D中学校 第3学年 B鑑賞「音楽の多様な聴き方に気付き、楽曲のよさや美しさを味わおう」 全3時間 教材 組曲「展覧会の絵」

#### ①題材を見通して目指す生徒の姿

曲想と音楽の構造との関わりについて理解するとともに、音色、旋律、テクスチャを知覚し、その働きについて感受しながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、「展覧会の絵」の音楽のよさや美しさを味わって聴く。一人一人が音楽に対する自分の考えをもち、それをプレゼンテーションにまとめる。仲間とともに考えを共有し合い、さらに試行錯誤するなど、自分の学習を調整して粘り強く取り組む。

#### ②具体的な教師の手立て

##### ア：曲との出会いの場の設定

曲と出会う際、作曲者や曲名等を伝えずに音楽を流した。感じ取った雰囲気や情景などを個人で Google スプレッドシート（図7）に入力した。その Google スプレッドシートは、他者の入力した内容を即時共有することができるようにした。

##### イ：考えを更新する場の設定

個人で聴き深めていく活動の際、同じ楽曲を選んだ生徒同士で近くに座り、自分一人では解決できないことを仲間に見つけることができる環境を設定した。また、プレゼンテーションの原稿がある程度できた段階

で、同じ曲を選んだ者同士で「プチプレゼン」を実施し、他者の考えに触れ、新たな考えをもつ時間を設定した。その際、言葉でのコミュニケーションだけではなく、友達の意見を音で確かめることを促した。

##### ウ：十分な思考の場の確保

曲と出会う時は3曲を全体で聴取したが、その後、プレゼンテーションをする1曲を選ぶ段階から GIGA 端末を利用した個々の鑑賞に切り替えた。個人でイヤホンを使用し、気になる部分を何度も聴き返したり、調べたりしながら楽曲と向き合う場の設定をした。

#### ③教師が講じた手立てによる児童生徒の姿の考察

##### ア：音楽に対する自分の考えをもつ

直感で感じたことなどを自由に入力することで、おもしろい、わくわくする等、自分の感情と関わらせて考えをもつ姿がみられた。曲との出会いで一人一人が自分の考えをもったことにより、その後、楽曲を聴き進めていった際に、自分の考えの変化について気付く生徒が多くいた。

	①第2曲 感受のみ	②第5曲 感受のみ	③第10曲 感受のみ
19 宮殿		弾んだように明るい	宴やパレードの様子
20			
21 暗い		びよんびよん跳ねてる	大成功（ハッピーエンド）
22 薄暗い感じ		急いでいる	エンディング
23 上品		追いかけてこしてる	王国
24 怖い		楽しそう	壮大
25 暗い		弾んでいる	祝福
26 静かな森のよう		リズムがいい	波乱ありの結婚式
27 暗い		ウキウキしてる	壮大
28 不思議		陽気	起承転結
29 落ち着いている		元気	壮大
30 暇		トムジェリ	何コレ珍百景
31 暗い		明るい	迫力がある
32 自然		明るい	映画のエンディング
33 怖い感じ、暗い		トムとジェリーみたい	壮大 明るい
34 不安		逃げてそう	高貴
35 不気味		忙しい感じ	一つの物語みたい
36 静かな雰囲気		慌ただしい雰囲気	すごく大きなお祝い
37 厳格的、物々しい雰囲気		慌ただしい、逃げてる	シンデレラみたい（壮大さと悲哀）

図7 生徒が入力した Google スプレッドシート

### イ：自分の考えと他者の考えを比較する

個の考えをプレゼンテーションで他者に伝えたり、他者の発表を通して、自分の考え方と比較したり、関連付けたりしながら、さらに感じ方や考え方を広げる様子がみられた（図8）。プレゼンテーションで自分の考えを表出する活動は、自らの考えをもつという点で、とても効果的であることを再認識した。

・弦を弾く音→暖かみのある音が午後の暖かい時間を表している  
・ピッコロやフルートの高音  
・全ての音にスタッカートがついている  
→小さなひなどりがびよんびよん跳ねているような可愛らしい様子  
・一定に奏でられているクラッシュシンバルの音  
→木々の間から差し込む太陽の光  
・ホルンの半音階&クレッシェンド→ひなどりの踊りのクライマックスに!!

図8 生徒のプレゼンテーション

### ウ：音楽を形づくっている要素やその働きの視点で音楽をとらえる

個人でじっくりと楽曲と向き合う時間を確保するために、GIGA 端末を活用したことは効果的であり、自分が気になる部分を繰り返し聴いていた。題材の終末における学習の振り返り（図

「卵の殻をつけたひなどりのパレエ」は、ほぼ同じ旋律が繰り返されていて、速度も速くリズムカルな曲なので、自分がリズムにのりたいたい時や、テンションが高い時に聴きたい。また、「キエフの大きな門」では曲全体が力強いので、私にとって元気をくれる曲だなと思う。

図9 題材の終末における学習の振り返り

9) では、自分にとってのこの音楽はどうか、どんな気持ちになるのかなど、自分とその曲との関わりや自分にとっての価値について考える生徒が多くみられた。

## III 研究のまとめ

### 1 研究から見たこと

「音楽的な感性」に焦点を当てて、「曲との出会いの場の設定」「考えを更新する場の設定」「十分な思考の場の確保」という3つの手立てを講じた結果、いずれの検証授業でも児童生徒一人一人が音楽に対する自分の考えをもち、他者と協働しながら音楽と向き合う姿を見取ることができた。検証授業を通して、児童生徒一人一人が音楽と向き合っている際の思考の流れは表4のとおり整理することができる。

表4 児童生徒が音楽と向き合っている際の思考の流れ

- ①聴こえてくる音楽を意識する。
- ②音楽の各部分の音が自分に強く残る部分とそうでない部分の印象で意識する。
- ③音楽の各部分の音を「音楽を形づくっている要素の視点」で整理して考える。
- ④音楽全体をイメージとして意識し、自分との関わりについて考える。

③の部分では、音楽的な見方・考え方を働かせる場面であり、知性や感性を働かせて知覚・感受したり、それらの関係について考えたりしていた。④の時点では、授業でその音楽に出合ったことで、学習したことを根拠としてその音楽が自分にとってどのようなものなのかを考えることができた児童生徒が多く存在した。①～④は、いずれも一人一人が「音楽に対する感性」が働かせているととらえることができる。この①～④の流れは必ずしも順序性があるわけではないが、おおよその児童生徒は、このような思考で学習を進めていた。

このことから、3つの手立ての成果が明らかになったとともに、表4の①～④の流れを視野に入れて、児童生徒の実態に合わせた題材デザインを考えることが「音楽に対する感性」の育成に資することがわか

った。

また、研究員は、児童生徒一人一人の感性を認めて尊重することを重視した。同じ音楽でも演奏したり鑑賞したりする中で「感じ方はみんな違う」「みんな違った表現をする」ということが明確になった。このように、感性が個によって異なるものであるということを見出し、児童生徒とともに再確認できた。一人一人の感性を尊重することは、個を認め尊重することであり、個別最適な学びの大切な視点でもある。これが明らかになったことはこの研究の大きな成果であった。

さらに、検証授業では、音楽に対する自分の考えと相手の考えをすり合わせることによって、新たな考えを創り上げること、対話によって自分の考えが変わっていくことに喜びを見いだしている児童生徒を多く確認できた。このように、音楽科における協働的な学びは、合唱や合奏など、音や音楽によるコミュニケーションだけでなく、言葉によるコミュニケーションも重要であることが明確になった。

これらのことから、「音楽に対する感性」は、一人で音楽と向き合うことでも磨かれるが、仲間と歌ったり演奏したり音楽をつくったり聴いたりする中で仲間の感性に触れ、刺激し合うことによって、個の感性が更新していくことが期待できる。また、他者の感性に触れることは、他者を理解することにもつながるはずである。個別最適な学びの中で感情が動くことを経験して自分の考えをもち、協働的な学びを通してそれを共有する、これは学校教育ならではの「感性」の育成だととらえることができた。

## 2 今後の課題

本研究の出発点は、これまでの成果を踏まえた上で、学習内容や活動を「児童生徒の立場」から見直し児童生徒の内面性に目を向け、その根底にある「感性」を豊かに育む教育に着目した学習内容や方法の開発であった。研究を進めていく中で、「感性の育成」が単に豊かな心の育成というレベルではなく、「音楽に対する価値を見出し、自分との関わりについて考える」ことまでに及ぶことが明らかになった。

しかし、さらなる児童生徒の「音楽に対する感性」の育成に向け、本研究の成果がいかに有効であるか、その実証が今後求められる。今後は音楽科の学びの系統性を考え、小・中学校で連携を図りながら、好事例の題材デザインを示していくことが必要である。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をいただきました先生方、また、研究をご支援いただきました研究員所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼を申し上げます。

### 【指導助言者】

川崎市立小学校音楽教育研究会 会長（川崎市立宮崎小学校長） 西田 裕子 先生  
川崎市立中学校教育研究会音楽科部会 部会長（川崎市立今井中学校長） 千葉 葉子 先生